

日本人中医診療記

その14

天津中医薬大学 柴山 周乃

12月10日の夜、昨年より10日ほど早く天津に初雪が降りました。積雪は2センチほどでしたので、翌朝の通勤通学にはほとんど影響がなく助かりました。12月7日は、二十四節気の「大雪」でした。山岳だけではなく、平野にも降雪のある時節ということから「大雪」といわれていますが、天津には暦どおり初雪が舞い、いよいよ本格的な冬の到来です。この冬は暖冬といわれていますが、22日の「冬至」の頃からはやはり厳しい寒さがやってくると思います。

2014年、わが大学に嬉しいニュースがありました。6月に第2回「国医大師」が発表されましたが、わが校の阮士怡教授（天津中医薬大学・第一附属病院主任医師）と石学敏院士（天津中医薬大学・第一附属病院名誉院長）の2人が選出されました。中国では、2009年4月にはじめて、衛生部、国家中医薬管理局、および人力資源・社会保障部が合同で全国から30名の「国医大師」を選出しました。これは国家級の中医大師の業績をたたえるとともに、その経験実績を後世に伝えるためのものです。以前にもお話ししましたが、阮士怡教授は天津中医薬大学・張伯礼学長の元指導教官で現在97歳です。最高齢と思いきや、今回の最高齢者は南京中医薬大学・干祖望教授で102歳です。ちなみに、今回の最年少者は西藏自治区藏医院・占堆名誉院長で68歳でした。天津では、ほかに張大寧教授（天津市中医薬研究院名誉院長）も選出され、天津からは3名も「国医大師」



2014年12月21日：原稿受理

に選出されたこととなります。私が師事している張伯礼学長の学術は、阮士怡教授の思想を受け継いでいますので、これからも学長の指導のもとでしっかり研究を続けていきたいと思ひます。

私事で恐縮ですが、2014年、ようやく外国人にも「医師就業資格」試験の受験が認められるようになり、10月に受験し合格することができました。中国では、医師資格と医師就業資格の2つがないと



医療行為は行えません。つまり、独立して外来で診療できないのです。私は、2006年に中華人民共和国の医師資格を取得しましたが、外国籍という理由で医師就業資格試験は土俵にも上がることができず、なんとなく中途半端な身分でした。受験前に学長と会食した際、「合格したら、今建築中の第三附属病院に日本人外来を設け、そこで診療を行ったらどうか」というありがたいオファーをいただきましたので、合格は悲願でした。試験は、医師法、薬事法と西洋医学臨床のみの出題で、中医はゼロでしたのでかなり厳しいものがありました。配点の多い論述問題が、私の専門の循環器科「狭心症」でしたので、運にも助けられなんとか合格することができました。中国人でしたら最短7年で取得できる資格が、1999年に中医の門をたたいた私には15年もかかりました。11月24日に、「中国中医薬報」の記者が北京から来て取材を受けましたが、「どうして、15年も頑張ることができたと思うか」と聞かれたとき、すぐには答えられませんでした。気がついたら15年も経っていた、というのが正直な気持ちですが、7年前に学長がおっしゃった「大丈夫だ。必ず道は開かれる」という言葉がどこかで心の支えになっていたような気がします。さらに研鑽を積んでいかななくては、と気の引きしまる思ひですが、長年の夢がかなったわけですから、「前進あるのみ」と思っています。

このエッセイを執筆中の12月中旬、天津ではインフルエンザが猛威を振るっています。今回は、中国で風邪対策には欠かせない、また中国の一般家庭の常備薬でもある「板蘭根^{ばんらんこん}」についてお話しします。清熱解毒作用のある「板蘭根」は、2003年のSARSの際にも大活躍しました。当時は、どの薬局へ行っても板蘭根は売り切れ



で、「薬市場から消えた」とまで言われました。以前、本学会誌に糖尿病合併症の連載を投稿していた呉深涛教授は、天津でSARS治療チームに加わり、泊まりこみで治療にあたっていました。SARSが終焉を迎え、大学附属病院に戻った呉教授から「板蘭根の煎じ薬を患者に吸引してもらったところ、かなり有効だった」と聞きました。天津動物園では、冬になると風邪予防に板蘭根を動物に投与していますし、山東省済南動物園でも冬季はパンダに板蘭根を投与しています。2013年、鳥インフルエンザが大流行したときには、蘇州、瀋陽など一部の動物園で鳥に板蘭根を投与しているニュースが流れていました。日本では、「カゼをひいたら葛根湯」というCMをよく目にしますが、さしずめ中国では、「カゼをひいたら板蘭根」といったところでしょうか。

「板蘭根」の名前は、『神農本草経』にはじめて記載され、1985年から2010年版まで『中国薬典』にずっと収載されています。板蘭根には生薬のほか、注射液、点眼薬があり、臨床で広く使われています。また、家庭薬としては顆粒剤、錠剤などがあり、顆粒剤はお湯に溶かしてすぐ飲むことができ、とても便利です。

板蘭根生薬*1

【基本原料】アブラナ科・菘藍 (Isatis indigotica Fortune) の乾燥根。

【性 味】性は寒、味は苦。

【帰 経】心・胃経

【効 能】清熱解毒・涼血利咽

【主 治】

1. 外感発熱，温病初期，咽喉腫痛。
2. 温毒による斑疹，耳下腺炎，丹毒，癰腫瘡毒。ようしゅそうどく

【用法と用量】 9～15 g, 煎じて服用する。

【使用上の注意】 体虚かつ実火熱毒のないものには使用禁忌。脾胃虚寒のものには慎重に用いる。

【現代研究】



1. 化学成分：インディゴチ

ン (indigotin), インディルビン (indirubin), β -シトステロール (β -sitosterol), パルミチン酸 (palmitic acid), ウリジン (uridine), ヒポキサンチン (hypoxanthine), ウラシル (uracil), シニグリン (sinigrin), アルギニン (arginine) など。

2. 薬理作用：板蘭根には、抗菌、抗ウイルス、抗内毒素、抗癌、抗レプトスピラ属細菌、抗白血病、抗酸化、解熱、免疫機能増強作用がある。

3. 臨床応用*2：

(1) 呼吸器疾患：インフルエンザ発熱、咽喉腫痛、耳下腺炎、扁桃腺炎など上気道ウイルス感染疾患の治療に多用されている。

(2) 消化器疾患：板蘭根は、肝炎治療の伝統用薬である。ウイルス性肝炎の予防、治療には確実に効果がある。そのほか、板蘭根顆粒剤を用い、再発性アフタ性口内炎、乳幼児の秋冬季の腹瀉、小児腸炎を治療する。

(3) 皮膚、骨格系疾患：带状疱疹、ばら色秕糠疹、尖圭コンジローマ、単純疱疹（ヘルペス）、肋軟骨炎の治療に良い効果がある。そのほか、乾癬、水痘、足底疣贅、尋常性疣贅などの治療にも用いることができる。

(4) その他：流行性結膜炎（板蘭根点眼薬）、尿路結石、ウイルス性心筋炎の治療にも用いることができる。

【副作用】 板蘭根の副作用は少ない。一般的に、服用時の顕著な副作用はないが、ごくまれに、悪心、嘔吐、食欲不振など消化器系の症状が現れる。板蘭根注射液は、蕁麻疹、多形性紅斑、アレルギー性皮膚炎、アナフィラキシーショックなどを引き起こすこともあるので、臨床で応用する際には注意が必要である。

【その他】 『中国薬典』に記載されている板蘭根は、“菘藍”の根茎と根の「北板蘭根」であり、“馬藍”の根茎と根を使用している南方地区の板蘭根は「南板蘭根」と呼ばれている。両者の薬性、効能、

臨床応用は基本的に同じだが、南板蘭根にはシニグリンの成分が含まれていないため、北板蘭根ほど抗菌作用はない。

私は、咳ぜんそくの持病がありますので、カゼは大敵です。家には板蘭根顆粒を常備し、ぞくぞくついたり、カゼをひいている人と接触したときには、必ず服用しています。また、なんとなくのどが痛いときには、溶かした液剤でうがいをし、おかげ様でここ数年、カゼで寝込むということはありません。「カゼは万病のもと」ですので、これからも板蘭根顆粒をじょうずに使い、過ごしていきたいと思います。

以上、今回は板蘭根についてお話をしました。

日本では、2014年も広島県を中心とする豪雨、御嶽山の噴火で多くの方が犠牲になり、また、長野県神城断層地震が発生するなど自然災害が多くの被害をもたらしました。東日本大震災の被災地では、再び厳しい冬を迎えられていることと思います。2015年、被災地での災害からの復旧が1日も早く進みますよう、また世界平和を心から願っています。

2015年末年の幕開けです。新年が素晴らしい1年となりますようお祈り申し上げます。祝大家 羊年快樂幸福！

文献

- * 1. 李学林・崔瑛・曹俊岭主編：实用臨床中薬学，人民衛生出版社，136-137，2013
- * 2. 万玉麗・万秀麗：板蘭根薬理研究総述，中華医学研究雑誌 7（11）：1189-1190，2007



プロフィール

柴山周乃（しばやま・ちかの）

愛知県名古屋出身

1996年 日本航空株式会社・国際客室乗員部退社

1999年 天津中医学院（現天津中医薬大学）本科入学

2006年 中華人民共和国・中医医師資格取得

2010年7月 天津中医薬大学・中医内科学博士課程卒業

修士課程は天津中医薬大学第二附属病院・循環器内科杜武勳教授に師事、「糖尿病性心疾患の中医病機メカニズム及び臨床治療」を研究。

博士課程は天津中医薬大学・張伯礼学長に師事、「中医および漢方医学による心疾患・脳血管疾患治療」を研究。現在は、引き続き張伯礼学長に師事し外来で診察および中国人学生の講義を担当。